留萌 いま・むかし

第六十回

原野の開拓

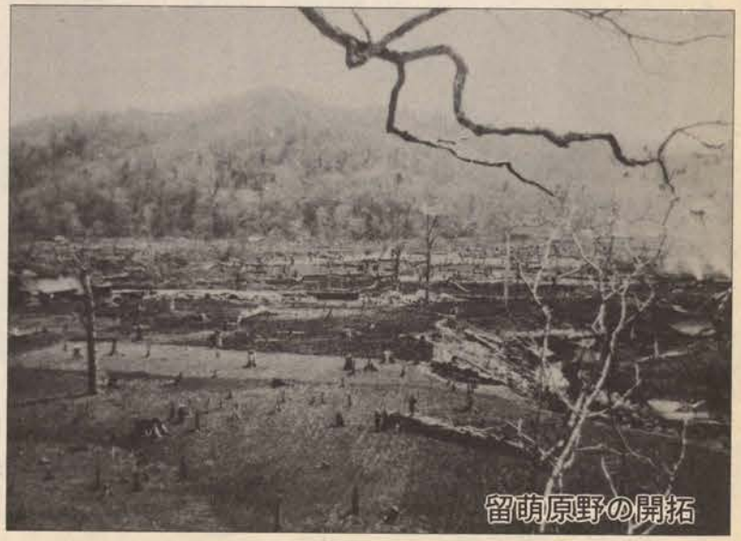
明治新政府は蝦夷地の開拓を国の重要施策として、蝦夷地を北海道と改めるとともに北海道開拓使を設置、北海道の開拓を推進していく立場をとった。内陸部の開拓を推進するために農業移民を積極的に推進していくこととなった。これは国策として推進され、順次農業開拓が推進していくこととなった。留萌地方も例外なく海岸部から順次農業移民が移植され、内陸部へと進行していった。

留萌での専業農家と覚しきものが記録に現われるのは、明治十三年の農業統計からである。それによると、留萌他二村（留萌村、三泊村、礼受村）に三戸十三人の農家があると記されている。明治十九年に北海道土地拝下規則が公布され、大原野の殖民地選定が終わるのが明治二十二年のことである。また、同時に土地拝下規則の改正をし、地祖の免税を行った。これは、北海道の内陸部の開拓が思うように進行しなかったことによる。

旧来北海道の開拓は政府が旧大名や寺院、富豪などに大地積の農地を分譲し、開拓を推し進めようとするものであった。しかし、その実効はあまり上がらず、これ以来一般農民の自由入植を奨励していくことになる。

留萌も、これ以降、徐々に原野の開拓が行われ始めた。

留萌原野への初めての入植は明治二十四年で、関口半平といわれる。また、金森貞蔵により、アイトシナイで明治二十八年ごろ稲作が始められている。そして、翌明治二十九年留萌の内陸の開拓にとっては重要な年であった。小樽の藤山要吉による藤山農場の開設である。この藤山の農場開設に応じて、明治二十九年第一陣十戸が入植し、明治三十一年まで六十三戸の小作農を入植させている。明治二十九年には留萌原野に鳥取県からの団体入植もあった。その翌年明治三十一年には藤山農場より更に奥地の御料地（幌糠、チバベリ、中幌糠、樽真布、峠下、ポンルル）への入植もあり、留萌の内陸部への開拓は急速に進展していった。明治三十二年には農家戸数二百九十九戸、一千二百二人。明治三十四年には農家戸数五百四戸、二千二百五十三人に達した。



留萌原野の開拓

Zing（ジィング） 12月

表紙の説明

東光小学校（当時国民学校）は大戦中の昭和19年11月13日、24学級で現末広町あたりに開校。昭和22年新学制実施準備会の決定により、新制中学校併置のため13学級となる。昭和24年校章制定。昭和27年8月3日留萌中学校完成し、旧に復す。昭和29年校旗制定。昭和50年新校舎完成、現在地に移転する。校舎は、鉄筋コンクリート2階建。児童数、605名の大規模校です。

ちびっこギャラリー

お子さんの絵を募集しています。 ☎2-1801内線293までご連絡ください。

「おとうさん」（港北保育所）

まつざわ たかのりくん（5歳・塩見町）

トラックのうんてんしゅをしている「おとうさん」をかきました。ちょっとこわいけど、やさしいおとうさん。ぼくは、おおきくなったら、おとうさんのようなトラックのうんてんしゅになりたいです。